

第七章 ブラジル移民と在日の日系ブラジル人

——アイデンティティの問題をめぐって

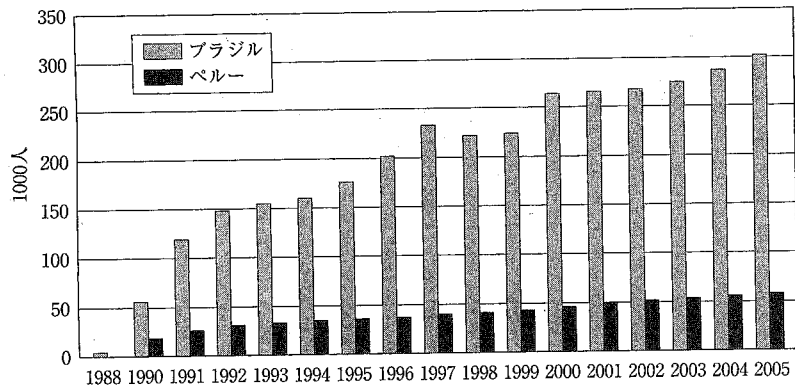
一 三〇万人を超える日系ブラジル人の移住とその背景

ヨーロッパの先進諸国では、外国人労働者の受け入れは戦後復興をとげた一九五〇年代半ばにはじまっていた。しかし日本では、農村が過剰な人口を抱えていたことで少なくとも七〇年代までは深刻な労働力不足に陥ることはなかった。八〇年代に入り農村に余剰人口がなくなつた時点で外国人の出稼ぎ労働者の流入がみられるようになったが、日本の場合、法整備等の受入れ体制が十分に整えられず、このことが多くの問題を後に残すことになった。当時、労働市場の開放をめぐって国論を二分する論争があり、日本の「同質性」なり「純血性」を損なうとする鎖国論も強く、政府も受け入れには慎重な態度をとつた。このため、多くの外国人が非合法の状態で滞在し、雇用や医療の面で人権に関わる問題を発生させた。

一方、この間に労働力の雇用をめぐる環境は大きく変化した。一九八〇年代を通して外国人労働者はいわゆる3K

後藤 晃

【図表1】 ブラジル・ペルー人の外国人登録者



(出典) 法務省入国管理局『出入国管理統計年報』各年次より作成。

送金の強い圧力のもとでの門戸開放が日系人を大いに引き寄せることになったのである。もともと日本国籍をもつ移民一世や二世の中の二重国籍をもつものの来日はすでに一九八〇年代はじめから始まっている。彼らは出稼ぎ目的で来日し、このためサンパウロなど日系人の多い都市では日本行きを仲介するエージェンツが活動をしていた。こうしたエージェンツもまた移動を促すうえでの役割を果たしたが、入管法の改正は大量現象としての人の移動を誘う制度改革としての意味をもっていたのである。

図表1は、外国人登録をしたブラジル人とペルー人の数を示したものである。このうち日系人とその家族がほとんどを占め、その推移をみると一九九一年に急増し、その後は比較的ゆるいペースで増加、一九九〇年代末に日本の不況で一時的に減少、二〇〇〇年代に入ると再び増加し、二〇〇五年にはこの二国で三六万人に達した。この数字には日本国籍をもつ日系一世と二世のうちの日本国籍をもつものが含まれていないから、これを加えると入国した日系人の数はさらに多くなる。また、出稼ぎで来日したがすでに帰国したのもかなりおり、来日経験者ということでは優に五五万人以上に及ぶと想定される。ブラジルの日系人の数は混血が増えていることもあって正確にはわからないが、一三〇万ないし一五

産業に多く就業し、日本人の嫌う部門の労働力不足を埋めるという特徴があった。しかし八〇年代半ば以降になると、雇用をめぐる規制緩和が進む中、労働コスト削減のための調整部分として外国人労働者の導入が経済界から求められるようになり、業務請負業、派遣業の合法化で、必要なときに供給を受け、必要がなくなれば切り捨てることのできる組織的な労働力としての外国人労働者の需要が増加した。

こうした企業の要請を受ける形で一九九〇年、入国管理法が改正され、かつて日本から移民として海外に移住した人々の子孫である日系人の在留資格が緩和された。もともともこの改正の意図が外国人労働者の合法的な受け入れにあったのか否かについては議論のあるところである。すでに一九八五年以降、日本に親族がいる限りで、日本からの移民の二世と三世は短期ビザが比較的容易に取得できるようになっていたが、一九九〇年の法改正では「定住者」の在留資格が新設され、外国籍の日系二世と三世、また非日系人の配偶者に更新可能な三年間の在留が認められた。

日系人を特別扱いしたのには、労働市場の開放で諸外国から出稼ぎ労働者が大量に流入するのを避けるという暗黙の了解があった。だがその背景には、日本社会に根強い同質性を重視する風土と血統主義があったことも確かである。日本人の子孫であれば日本人の血を引き日本の文化的要素を引き継いでいるはずだから、日本の同質性を大きく揺るがすことはないし、日本社会にも容易に適應するだろうという政治的な思惑である。この結果、南米諸国から多くの日系人が流入し、改正入管法が実施に移された翌年には一気に一〇万人近くが入国した。

日系人の急増には南米諸国の経済問題も深く関係している。一九八〇年代の南米は「失われた一〇年」と称される経済危機の時代であり、アメリカ主導の経済自由化政策と経済政策の失敗によって対外債務が膨らみ一〇〇％にも及ぶハイパーインフレに見舞われ社会は著しく混乱していた。この経済危機の最中においてアメリカをはじめとした国外に数多くの出稼ぎ労働者が流出し、ブラジルではこの時期に一四〇万人余りが国外に流出している。この労働力

○万人と推定されており、数字でみる限りでは日系人の三人に一人が日本に在住するか出稼ぎの経験をもつことになる。

日系人は当初、単身での入国が多かった。バブル期には日本とブラジルの間にほぼ五倍の賃金格差があり一、二年の短期の出稼ぎで大金を手にして帰国するケースが多かったといわれている。しかし一九九〇年代半ば以降になると、バブル崩壊によって出稼ぎの仕事が不安定化して賃金が下がりがかつ残業も減ったことで年間の出稼ぎ収入が減少、また子供を含む家族での移住が増加したことで、滞在が長期化する傾向がみられるようになった。出稼ぎで来日し一度帰国してから再度来日する還流型の出稼ぎも増え、移住の形態も多様化した。いずれにせよ移住の目的は出稼ぎであり資金をためて帰国する「帰国を予定した移住」である。だが、近年は滞在が長期化して帰国の気配があまりみられなくなり、滞在がさらに長期化すると定住化へと進む可能性も出てきた。

一方、滞在の長期化にもかかわらず日本社会への適応はあまり進んでいない。帰国を予定していることで適応に向かないのも当然かも知れないが、日系人と日本人の接触の場が乏しく、とくに職場の環境が適応を妨げる要因となっていることも事実である。言葉のハンディがあるため日本人と対等に競争することがむずかしく、一般の労働市場も日系人を締め出す傾向にある。このため業務請負会社や派遣会社に組織的に雇用され、日本人社会と隔絶したところで管理されがちである。日本人と接触する場面が少ないことはそれだけ日本語習得のチャンスも乏しくなり、日本社会への適応もおおのずと限界がある。つまり、日本人社会との接触が乏しい労働と生活の環境下で滞在を長期化させているのが出稼ぎ日系人の現状といつてよい。

日系人は日本人の血を引き日本の文化と社会を理解できる存在として想像され、出稼ぎ労働のために来日した客人として社会的に受け入れられてきた。しかし、滞在が長期化し定住化が進むと、さまざまな摩擦が日本の社会との間に起こる可能性も生まれる。在留資格が与えられた日系人が将来どのような道筋をたどるのか。還流型の出稼ぎ労働者であり続けるのか、マイノリティー集団として定住化の道をたどるのか、日本に適応し同化のプロセスをたどって日本社会に統合されていくのか。これもまた議論のあるところである。いずれにせよ、個々の日系人にとっては日本社会との緊張と内面での葛藤を余儀なくされるであろう。

この緊張と葛藤はかつて日本から海外に移住した人たちもまた経験したことである。もちろん時代状況も移民の意識も大きく違っている。たとえばかつてのブラジル移民の場合、移住した先と母国との距離は果てしなく遠く、多くが金を稼いで日本に戻ることを夢見ながら果たせずに定住化の道をたどった人たちである。これに対して、日本に滞在する日系人は日本か本国かを選ぶことができるし、帰国しようと思えば飛行機でひとつ飛びである。また日本からの移民は生きる限界状況でアイデンティティの危機を経験したが、これと比べて日本に滞在する日系人は同化を求められることもないためアイデンティティをめぐり葛藤においてもブラジル移民ほどには深刻ではない。ただ、大量移住が始まってからまだ十数年しか経っておらず、滞在がさらに長期化していくと適応をめぐり緊張と葛藤が増すであろうし、日系コミュニティと日本人社会の間のストレスも高まる可能性もある。

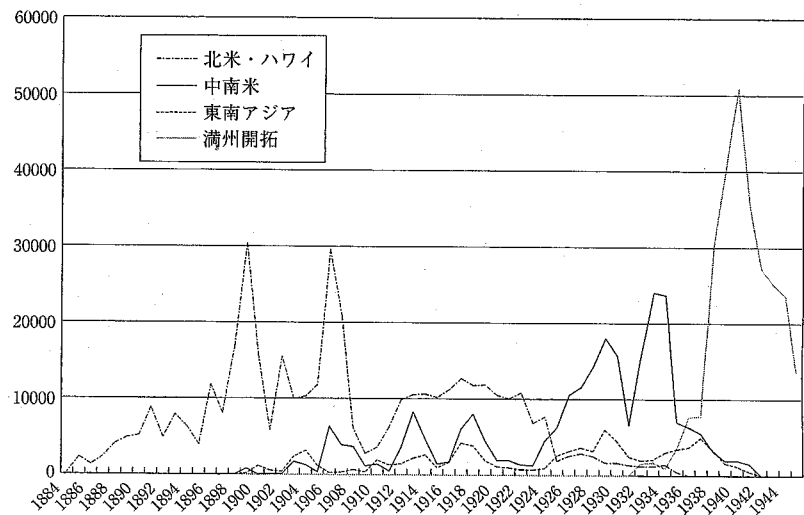
こうした問題意識から、ここでは先ずかつて日本からブラジルに移住した人たちの意識の変遷と定住化のプロセスをたどり、これと比較する形で日本に滞在する移民の二世と三世を、あるファミリーの事例で取り上げ、アイデンティティをめぐり諸問題と定住への動向をさぐることにする。

五二年に中南米への移民が再開され、実質ほぼ一〇年間続き七万人余りが送り出された。中南米移民の中で移民数が最も多かったブラジルへの移民をみると、一九〇八年に笠戸丸で七八一人が送られたのを皮切りに、戦前の三三年間に一八万八三〇二人、戦後五万五九六四人が移住している。このうち戦前の三分の二は一九二五年からはほぼ一〇年間の移住であり、これには過剰人口を抱え農産物価格の低落で困窮化した日本の農村問題が深く関係している。一九二〇年代には小作争議が頻発し、一九二七年の金融恐慌、二九年の世界恐慌、さらに三〇年の農業恐慌によって農村は極度に困窮し負債を累積させた。さらに都会での失業者が出身農村に戻ったことで農村に過剰人口が堆積し、農村における窮乏化と過剰人口が人口排出の圧力となった。したがって日本からの移民はブラジルに限らず窮乏化した農村出身者が多く、貧農や農地を相続できない次三男が多数を占めた。たとえば、一八八五年から三二年まで海外に出稼ぎに出た移民の構成を多数の移民を送出した広島県の事例で見ると、農村の土地なし層が四四・八%、〇・一ヘクター未満層が一三・九%、〇・三ヘクター未満層が一〇・三%を占めていた。

日本からの移民の歴史は国家によって十分に保護されてこなかった移民受難の歴史でもある。戦前のブラジル移民でみると、民間の移民会社によって進められたこともあり人権に関わる多くの問題を残した。初期の移民は、奴隷制廃止とそれに続くイタリア移民の帰国で労働力不足の状態にあったコーヒー農場に送られた。奴隷制を遺制として残していた農場での非人間的な扱いに耐えきれず逃亡や集団での脱走が相次ぎ、生き残りをかけて奥地の密林やサンパウロの都市に逃げ込み、半ば無法状態の中で生きる道を模索して辛酸をなめ、病气や貧困で多くの犠牲者を出した。

一九二〇年代に入ると集団でサンパウロ州やアマゾン奥地に向かい開拓が行われたが、ここでも生存の極限で彷徨し、帰国どころか自らの生存そのものが確証をもてない現実には遭遇する場合が多かった。つまり移民を送る側が十分な調査を実施せず、日本の政府も移民を保護する十分な姿勢をとらなかつたことで、移民送出は日本からの棄民の

【図表2】戦前における地域別海外移住者数の推移



(出典) 外務省『わが国の海外発展』1971年より作成。

二 ブラジル移民の歴史と

アイデンティティの変遷

(1) 移民の棄民的性格

日本からの本格的な移民は一八八〇年代半ばのハワイ移民にはじまる。戦前の海外移住者数の推移を示した図表2からわかるように、日本の移民史において移住地と移民数にかなりの変動があった。これには移民を送り出す側である日本の経済状況と政府の移民政策、また移民受入国の政策が関係している。移民の流れをたどると、十九世紀末から二〇世紀初めの四半世紀、ハワイを含む北米への移民が主流をなしていた。しかしアメリカで排日の動きが強まる一九二〇年代半ばを境にこの地域への移住が減り、代ってブラジルなど中南米が主要な移住先になった。さらに一九三〇年代半ばになると中南米への移住も減りはじめ、日本の満州政策とからんで二三十万人にも及ぶ大量の農業移民が満州に送り出されている。また、敗戦後は、外地からの六〇〇万人の帰還と経済の破綻で、過剰をきわめた日本の人口をわずかでも排出すべく一九

様相を呈していたのである。

移民が増加するとアメリカと同様にブラジルでも日本人移民を排斥する動きが強まった。日本人が多く移住したサンパウロ州では、早くも一九二〇年代はじめに、言語、風俗習慣が違うことを理由に移民受け入れに否定的になっていったが、移民送出を積極化させていた日本政府は抵抗の少ないアマゾンへの組織的な移民送出をはかって熱帯の未開地への移住を推進した。⁵一九三六年に始まる南米の後進地帯であるパラグアイへの移民もこうした排日への対処であり、移民の環境はきわめて悪く、見切りをつけてアルゼンチンに逃避行するものも多く出た。戦後の移民も同様である。戦前に移住した日系人の呼び寄せもあったが、受入国政府の要請のままに十分な調査もせず未開地の移住地が選定され移民が送出された。このため移住した土地で成功した例はきわめて少なかったといつてよい。

ブラジルでは、日系人の移民は移住後に家族を引きつれての移動を一〇回、二〇回と繰り返しているのが普通であるといわれている。⁶これは移民送出に人口過剰問題など国内問題の解決が優先された結果であり、移住地の環境が劣悪であったことから棄民的性格を帯びていたことを示すものである。移民の相当数はその後サンパウロに移り住み、また農業で成功したものも多いが、これは移民政策の成功を意味するものではなく、場所を変え仕事を替えて苦勞した日系人自身の努力の積み上げによるものといつてよい。

(2) 移民の意識と定住化のプロセス

日系移民を長期に支配してきたのは、日本への帰国を予定した一時的な滞在者という意識であった。当初より定住目的で移住した人は少なく、多くは生活難からやむなく移住し錦衣帰国を夢見ていた。しかし、ブラジル移民の初期に「ハワイの五倍遠く、収入は五分の一」といわれた厳しい環境下で、帰国の目処もつかずに滞在が長期化し結果と

して定住化の道をたどらざるを得なかった。これは移民の定住率にも現れている。移民の多くが移住したサンパウロ州における一九〇八年から三二年までの定住率を他国からの移民と比較すると、イタリア移民が一三%、ドイツ移民が一八%なのに対し、日本人の移民は九二%ときわだつて高いが、この数字は錦衣帰国を夢見て果たせなかつたきびしい現実を物語っている。⁷

錦衣帰国を実現できず滞在が長期化したことは、移民の意識や心情にも大きく影響した。滞在が長期化した移民が採りえる選択としては、現地の言語を学び現地社会に適応するブラジル社会への同化か、現地社会への適応を生活に必要なレベルにとどめあくまで帰国の可能性をさぐり続けるかのいずれかである。もとより永住目的の移民は祖国との絆を断ち切る覚悟があり適応に向う傾向が強い。しかし帰国を予定しているゆえに祖国を断ち切れない日系一世はその多くがブラジル社会への同化を拒否して日本人として生きようとした。適応をブラジル社会で生きる上での必要最小限に留めるといふものである。これは前山隆の言葉を借りれば、帰国までの間、他人の家にお世話になっている「客人」としての意識である。⁸

この場合、日系人のコミュニティが物質的かつ精神的なよりどころになった。このコミュニティは、マイノリティ集団の防衛意識から生まれ日系コロンニアと呼ばれたが、「客人」意識の強い日系人にとつての精神的な根拠地として機能した。アイデンティティは言語や文化を共有する民族など自らの自画像が描きやすい個別性の中で確保されやすく、こうした共同体への帰属によつて生存と精神的な安定が保障された。祖国から遠いブラジルの異質な社会で日本人として生きようとする移民にとつて日系コロンニアは精神的な安定確保の重要な場であったのである。

ただこうした移民のあり方は、移民受入国であるブラジルの国家や社会との間に摩擦を生むことになる。とくにこの摩擦が日系人にアイデンティティの変更を強く求めるまでに深刻化するのは、ブラジルと日本の双方でナシヨナリ

ズムが強まる三〇年代後半以降である。ヴァルガス政権の一九三九年に始まったブラジル化運動は、ブラジル人のアイデンティティを堅固なものにする狙いから、移民国家の特徴でもある文化の多様性を否定する意志で発揚され推し進められたため、日系人にとっても同化を求めるつよい圧力となった。一九二〇年代から三〇年代は日本人のブラジル移民がもつとも活発化した時代であったが、日本人移民は日系コロニアに閉じこもりがちであり「日本人」に固執したことでブラジルの国民的な統合になじまない存在として嫌われたのである。そして日本語教育の禁止、日本語の新聞発行の禁止という形でブラジル化を求める圧力が強められ、日本人移民のアイデンティティを大きく揺るがすことになった。

本国から棄てられた存在として自らを意識した移民の中には日系コロニアとの関係を弱めて同化の道をたどるものが生まれていた一方で、同化の圧力は日本への精神的な回帰を強め、日本人としての意識を強める形で作用し、ますます強く「日本人」になっていく移民のグループも多かった。つまり、帰国が実現不可能にみえしかも同化の圧力が強まると、親に棄てられた子供のようブラジルへの適応の道をさぐりはじめる一方で、これとは逆に祖国がいとおいしく母(祖国)のもとに帰りたい気持ちさをさらに強めることにもなった。いずれにせよ、日本人を続けるか同化するかをめぐり深刻な葛藤を余儀なくされたのである。

一九四五年の敗戦は移民にさらに大きな意識の変容を迫った。日本の敗戦は帰国の道が閉ざされることを意味したからである。ナシヨナリズムの高揚期に排日機運が強まり同化が求められた苦難の時代に生きた日系人にとって、祖国の敗北は精神的な拠り所の喪失でもあったといつてよい。

日本が戦争に勝ったとの信念をもつ日系人グループ「勝ち組」と日本が負けたことを認識するグループ「負け組」の紛争とテロの応酬についてはよく知られている。これは移民の一部によって仕掛けられた事件ではあったが、日本の敗戦を信じたくなかった人たちが多かったことを示すものであり、当時の日系人の心情をよく表している。もちろん日本の敗北を認識していた人たちが数の上では多かったが、日本の敗北が日系人にそれだけ大きなショックを与えたということである。

これはまた次のエピソードからもわかる。日本の敗戦もなくアメリカの軍艦がサントスに寄港した。この軍艦に掲げられた星条旗を日の丸にすり替え写真が日系人の間に流れると日本の軍艦が自分達移民を迎えに来たというデマが広がり、資産を処分してサントスに向かった人たちもいたといわれている。戦勝国日本が自分たちを迎えにきたと信じるほどに日本に帰りたかったということであろう。

もちろん、日系人のアイデンティティのあり方をこのように簡単にまとめることはできない。自分たちが棄民として日本から放逐されたのだと感じた段階で、日本を拒否してブラジルに同化した人たちもおり、彼らは日本語さえ忘れようとした。また、ブラジルで生まれ育った二世は移民の一世とは異なり日系コロニアに帰属しながらブラジル社会に適応していったものも多い。だが一世の場合には、日本の敗戦を契機にブラジル社会への適応を進め、ブラジル人になる道をたどったものが多かった。帰国の可能性がなくなりブラジルに骨を埋めることを覚悟したときに適応に向かい、移住から永住へ、そして現地ブラジル社会への同化という道筋をたどったのである。

戦後にブラジルに移住した移民はこうした葛藤を経験しなかった点で戦前の移民とは違っていた。彼らは日本が民主化された時代を経験し、日本人として移民したため、ブラジル人になり日本語を使わなくなった戦前の一世を「ブラジルボケ」と称し、移民の意識に大きなずれが生じたのである。

三 ある日系人ファミリーの日本移住

(1) 滞在の長期化と日系ブラジル人のコミュニティ

日本に在住する日系人の場合、ブラジルに移住した移民とは移住をめぐる環境が大きく異なる。予定した資金を稼ぐ年月を計算して帰国のスケジュールを立てることができるし、帰国しても再来日が可能である。また戦前のブラジル移民は祖国との距離が遠ざかるほど祖国への思いを強くし、帰国の道が断たれた時点でブラジルへの適応の道をたどったが、在日の日系人は本国ブラジルから切り捨てられる不安はなく故郷喪失感も大きくはない。したがって移住地でのアイデンティティをめぐる状況はブラジル移民とはかなり違ったものといえる。

しかし、一方で日本での滞在は長期化している。五年、一〇年と滞在期間を引き延ばし、長期に滞在する傾向が強まっている。帰国を予定した還流型の出稼ぎの性格をもちながら、根拠地を日本に移して定住化をたどっているものも多い。ただ大量の移住が始まってまだ十数年しか経過していないこともあり、ブラジル移民のような定住から現地社会への適応というプロセスをたどっておらず、相変わらず「客人」の状態で日本に滞在し続けている。多くの日系ブラジル人はブラジルに帰ることを予定しており、日本人社会も帰国を前提として彼らと接し日本への同化を求めている。ブラジルに移住した日本人の子や孫として他の外国人労働者とは区別し、またいずれはブラジルに戻る客人として対応している。

先にみたように滞在の長期化には日本とブラジルの経済や社会の状況が関係している。ブラジルでの生活が不安定であれば、賃金の高い日本に滞在することを選択するであろう。この場合、長期滞在を保障する制度や日本における社会的な環境も判断の基準になる。雇用の安定化や子供の学校教育はその重要な要素である。また彼らの精神的・物

質的な安定を保障するコミュニティの存在もまた一つの要素であり、とくに適応が限定的な現時点においては日本での生活の拠り所となる日系ブラジル人のコミュニティの存在が重要な意味をもつ。しかし、在日日系人のコミュニティはあまり育っていない。ブラジルに移住した日本人が組織した日系コロンビアのような確固たるコミュニティは形成されにくいとも言われている。一概に日系ブラジル人といっても、出身、学歴、来日の動機など様々であり、混血も多く肌の色などによる偏見や差別も厳然として存在しているからである。コミュニティとして機能しているのはむしろ親族や知人からなるより身近な社会であり、兄弟や親戚などの呼び寄せによって作られた親族のコミュニティはこの点で重要な役割を担っている。ブラジル社会は親族の結合が強い社会といわれており、在日の日系ブラジル人の場合も親族コミュニティがその機能を果たし、これを拠り所として滞在を長期化させている側面があると考えられる。次に、日本に滞在する日系ブラジル人の一つのファミリーを取り上げ、このコミュニティの機能と帰属する人々の意識や考え方についてみていく。

(2) ある日系人ファミリーの日本移住のプロセス

図表3は、日本に滞在する日系ブラジル人のあるファミリーの家系を示したものである(一世をA、二世をB、三世をCで表記)。一九三〇年にブラジルに移住した移民一世のA-1と、一九五三年に移住したその妻A-2を軸にその子(二世)と孫(三世)の世代が記されている。またこのファミリーと血縁関係にある個人も必要な範囲で加えられている。筆者は移民二世のB-1と知己を得、彼を介してこのファミリーから情報を得ることができた。一世は日本国籍であり、二世と三世はブラジル生まれのブラジル国籍である。二〇〇七年三月の時点でファミリーの成員のほとんどが日本に滞在し、またブラジル在住のものも来日の経験をもっていた。しかも日本に在住する二世と三世は

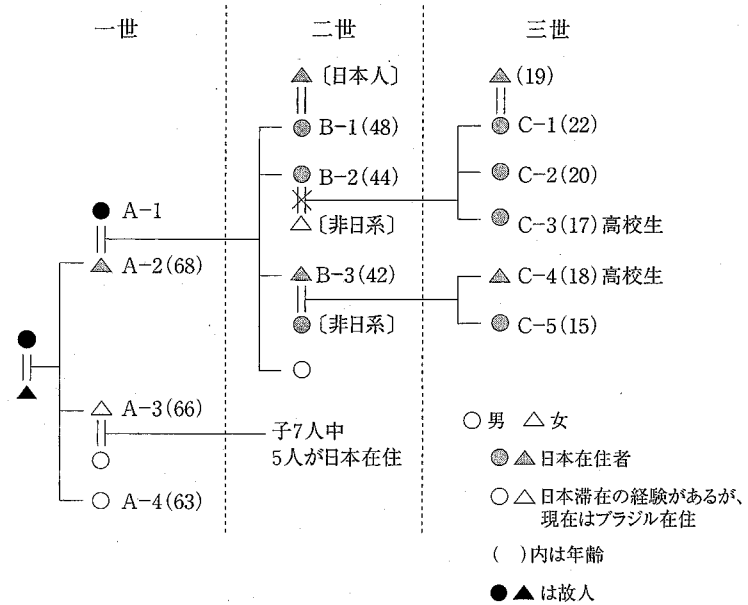
興味深いのは、帰国を予定し現地社会への適応に努めてこなかったA-2の母が入植から二八年経った一九八二年、夫が死に子供が自立したこともあって故郷の広島に帰ったものの、激しく変化した日本に適応できずにブラジルに戻ったことである。滞在の長期化が再適応を拒んだのである。滞在の長期化は本人の意思に関わりなく現地社会への適応を不可避としたが、これは滞在が長期化している在日日系ブラジル人の将来をも暗示している。

戦前の移民であるA-1も日本人を貫こうとした。しかし彼の場合は敗戦を契機に日本人を棄てる決意をした。その妻によると「結婚したとき、夫は日本語を忘れていたのではないかと思った。だが本当のところは、ブラジル人になるためには日本語はいらないと考えていたようだ」ということであり、敗戦時三五歳で大きなアイデンティティ

を鍛えられ、ブラジルでも日本人としての誇りをもち続けていた。しかし、日本の敗戦後はブラジル人になることを決意しその後は日本語をほとんど話さなかった。

A-2は一九五三年、一五歳のときに両親、妹、弟とともに、アマゾンのモンテ・アレグレに開拓農の子として移住した。原始林を開発し五年経てば土地をもらえるとという約束で果樹の苗を植えたがうまくいかず、二年後にはこの開拓地を離れ、港町レシフェに移住した。モンテ・アレグレの開拓地には一九五三年から五五年まで一二八家族が入植したが一〇年後にはその四分の三が離脱している。戦後の移民は定住目的で送り出されたが、この両親の場合は戦前の移民と同様に五年を目処に、また五年で定めなら一〇年で帰国するつもりであった。このためポルトガル語は話さず、家では故郷の広島弁を使い日本食を食べる日本的な生活スタイルを保持し、子供の結婚相手も日本人と決めていた。彼女によれば、モンテ・アレグレの開拓民のほとんどが同じ考えであったという。家族とともに移ったレシフェでA-1に出会い一九五八年に二〇歳で結婚したが、両親はここから移住地を転々とサンパウロ州で借地農として終わっている。

【図表3】本論文で取り上げた日系ブラジル人ファミリー (2007年3月時点)



日本滞在の期間が六年ないし一六年と長く、いずれはブラジルに帰る予定でいるものの、その確信も揺らいでいる。

はじめに、このファミリーの起源となるA-1とA-2がブラジルに移住した経緯とブラジルでの経歴を紹介し、ブラジル化の過程をたどることにする。

A-1は熊本の子として一九一〇年に生まれている。アマゾン開発が日本政府のてこ入れで進められていた一九三〇年に移住青年の養成目的で設立された国士館高等拓殖学校に入学し、翌三一年、二二歳で「南米の新天地を目指して」パリンチンスのアマゾンニア研究所に行き開拓の実務についた。しかし一年ほどでここを離れ地方の警察の柔道教師などの仕事に就き、戦後はプロレス興行、軍隊の柔道教師、道場経営、マッサージュ業などに従事した。開拓移民ではなく、少年期に厳格な軍人の家庭で育ったこともあって「日本精神」

危機に直面し日本人であることを止めたのである。彼女も結婚後は日本語を話すことはなく、子供にも日本語を教えなかった。

つぎに、このファミリーのメンバーが日本に来ることになった経緯をたどる。出稼ぎ目的で最初に来日したのはA・1・2の弟のA・1・4である。一九五三年に一〇歳で両親とともにブラジルに移住した移民一世で、親のあとを継いでサンパウロ郊外で野菜作りをしていたがうまくいかず一九八八年に来日した。帰国後は日本で稼いだ資金を元手に再起し、農地を購入して現在も農業を続けている。日本国籍をもつ日系一世の日本への出稼ぎは一九八〇年代初頭から徐々に増えつつあったが彼もその一人である。

A・1・1とA・1・2の四人の子のうち現在三人が日本に滞在している。最初に来日したのは次男のB・1・2である。彼はサンパウロの北六〇〇キロにある都市ペロオリゾンテで警察官をしていたが、一九九〇年、二七歳のときに日本滞在中の叔父A・1・3を頼って単身で来日した。彼は短期の出稼ぎの後ブラジルに戻ったが、翌九二年、非日系ブラジル人の妻と六歳、四歳、二歳の三人の息子を連れて家族で再来日した。しかしその二年後にブラジル人の妻と離婚、妻と三人の子どもは帰国した。彼は日本に残りすでに滞在一六年になる。また三人の子は二〇〇一年に再来日している。B・1・2は現在、日系ブラジル人を雇用する業務請負会社の労働者として働いている。日本語を流暢に話し、勤務する業務請負会社では日本語能力を生かして現場で日系人労働者の管理業務を担当している。

次に来日したのはB・1・1である。彼は一九五八年生まれで、経営大学を卒業後にフィヤット社に勤務、退職後にマツサージ業を経営した。しかし経済の不況で経営が悪化、一時アメリカに出稼ぎに行ったが、一九九一年四二歳の時にB・1・2を頼って来日した。日本では業務請負会社の労働者として茨城や千葉の工場のラインで働き、その後、トラック運転、また老人介護のデイサービスなどの職歴がある。

A・1・2の長女B・1・3は一九六五年生まれ、非日系ブラジル人と結婚し、二〇〇七年三月の時点で一八歳と一五歳の二人の子がある。非日系人との結婚には周囲の一世の強い反対があったが、これは日本人であることを強く意識してきた日系一世の一般的な反応といつてよい。しかし、二世はブラジル人との結婚に抵抗感は少なく、四兄弟のうち三人までが日系以外のブラジル人との結婚歴がある。日系三世では混交率は四割以上、四世では六割を超えているといわれており、日本に在住する日系人に混血の多いのもこの理由による。エスニック・コミュニティーを維持してきたブラジルの日系コロニアも離婚によって将来は消え去る運命にあると考えられる。

彼女はB・1・1の呼び寄せで一九九二年に夫と一歳の娘、それに一世の母A・1・2とともに来日、二年後に帰国して夫とともに建築材料の商売を始めた。しかし軌道に乗らず七年後の二〇〇一年に家族で再来日した。夫は造船所で働き溶接の技術をもつため比較的安定している。

このファミリーの場合、一九九〇年の入管法改正以前に一世の出稼ぎとB・1・2の短期ビザによる出稼ぎがあり、改正以後に呼び寄せによる兄弟の移住が始まった。当初は一年程の短期で来日し、帰国後、家族で再来日して長期に滞在するという特徴がみられる。来日の目的は、農地の購入や起業などさまざまだが、高収入の魅力が大きい。また、A・1・2の妹A・1・3や弟A・1・4の子も多くが日本に長期滞在し、それぞれに親族のファミリーを形成している。

(3)二世のアイデンティティ

来日中のファミリーの成員をみると日本に対する意識にそれぞれ特徴がみられる。二世と三世の間で違いが大きい。同じ世代の間でも日本人社会との接触の濃淡で違いがみられる。ただ、日本に滞在する親族コミュニティーの結束が強く、コミュニティーへの帰属が精神的な安定を保障している。

まず日系二世のB-1の場合でみると、日系二世を特徴づける「日本人の要素をもつブラジル人」が来日後の意識を強く規定してきた。彼によると、ブラジルでは日系人に対して「頭がよく、よく働き、まじめ」というステレオタイプの評価があり、「ニッケイ」「ジャポネ」と呼ばれて区別され、優秀で特異なマイノリティーとみられる傾向がある。彼が住んでいたのが日系人の比較的少ない地方都市ベロオリゾンテであったことが関係していると思われるが、ブラジル人としてブラジルに居住している時も常に「日本人」を意識せざるを得なかった。つまりブラジル社会にいて自らを「日本人としての要素をもつブラジル人」として意識していたという。

一般に、二世はブラジル生まれのブラジル人であるから移民一世とは祖国をめぐる意識において基本的に異なる。ブラジルを母国としブラジル社会で育った日本人の顔をもつブラジル人ということになる。ただ、移民一世が子供のブラジル人化を好まず、日本的な価値観を教え日本語教育に熱心であったこともあり、日本人としての心を残したブラジル人として成長したといってもよいだろう。もともと移民一世の現地社会への適応の度合はさまざま、A-1のようにブラジル人になるためにあえて日本語を使わないものもあり、一世に育てられた二世もまた一様ではない。子供の頃から親とともに奥地で開拓農業に明け暮れた二世の場合、教育も十分に受けられなかったために日本語もポルトガル語も中途半端な二世が育ったが、その一方でサンパウロなどの都市で高等教育を受けた二世のなかには日本的なものを守ろうとする一世に反発しブラジル化を強めるものが多かったといわれている。

いずれにせよ両親や日系人社会を通して知る日本は実際の日本とは大きく違うものであった。これは一つに、移民一世から教えられた日本は彼らが日本を離れる前の昔の日本であったこと、また一つに、時間が経つにつれて過去の日本の汚い部分はそぎ落とされて美化されたことによる。帰国を諦め日系人の誇りをもつブラジル人になることを決意したとき、自分たちの血と文化である日本は美化され象徴化されて、現実と乖離する傾向にあった。

両親や学校の日系人教師から教わった日本に関心をもち日本に留学したある二世の場合、「移民が保持している価値体系、風俗、習慣等がはたして純粹に日本的なのでしょうか」と自問する。日本に来て見たものは残酷なほどに激しい生存競争が繰り広げられた余裕のない社会であり、思い描いてきた「日本」との落差があまりに大きいためそれまで自分の中の日本的要素と想っていた日本が崩れ去るのを感じている。そしてこのプロセスを経て、「二世はブラジル人」なんだということを認識させられた。

B-1の場合も同じである。彼は日本に来るまで日本語を話せなかったが、「精神的な国」としての日本に憧れ、ブラジルで「ジャポネ」として区別されてきたこともあって自分と日本とのつながりを強く意識してきた。しかし来日し現実の日本に遭遇して「自分の中の日本人」が崩れ去るアイデンティティの危機を経験した。

日系二世が来日して受けるもう一つのショックは、自分が外国人としての扱いを受け区別されたことにある。日本との文化的、血縁的なつながりを意識しているにもかかわらず、これを拒絶されたということである。日本人社会は日系人を同じ文化と価値観をもつ分かり合える相手と想像していた。しかしこれが裏切られると一般の外国人以上に厳しく反応し、相互の誤解が緊張を生む結果を招き易かったのである。

この二重のショックは「日本人は仕事やお金ばかり、人情が薄い、若い人は自己主張がなく、職場では他人のせいにし言い訳ばかり、上司の言うことは間違っているも批判しない」という厳しい日本人批判となり、日本に滞在してブラジルにいる時以上に「ブラジル人」であることを強く自覚させられることになった。もともと、このことは自分の中の日本人的要素を否定することを意味しない。むしろ日本が変わったと認識することで現代の日本への適応を避けながらも日本への関心は持続し、日本人との関係をもとめて日系人社会に閉じこもる姿勢を見せていない。これは日本人の親をもつ二世を特徴づけるものともいえるだろう。

(4) 三世のアイデンティティ

日本在住の日系ブラジル人は一九九〇年代初めには一世と二世が中心だったが、現在は二世と三世であり、とりわけ三世とその子どもである四世が増えている。先に示唆したように、三世は日本に対する意識の面で二世とは違っている。移民一世の親から美しく象徴化された日本を学び自分の価値観や文化の中に日本を意識してきた二世とは異なり、すでに完璧なブラジル人であり、あくまで自分のルーツとして日本をみていたに過ぎない存在である。しかも高い離婚率から顔に混血の特徴をもつものも多い。日本に対するイメージも、テレビなどの情報を通して知る豊かさや消費、ビルの乱立する都市の風景という、より現実的なものである。このため、イメージと現実の落差によって受けるショックも二世ほどには大きなものではない。意識の上でも外国人として来日し自分の中の日本的要素を自覚することがなかったから、自分が何者かについて深刻に悩むことも少ない。ただ、日本での滞在の過程で、日本人社会から文化なり価値観を共有する仲間と誤解されることによる摩擦は二世の場合と同様に大きかったといつてよい。

二世が中核をなすこのファミリーの場合、三世の年齢は比較的若い。二〇〇七年三月の時点で日本に滞在する三世は五人、年齢は一五歳から二二歳の間である。このうち三人は高校生、二人が仕事に就いている。彼らは日本で少年期を過ごし親も日本に滞在しているから、本人が出稼ぎで来日した三世と同列に扱うことはできない。むしろ日系社会一般では四世の問題と共通する点が大きく、親や親族コミュニティとの関係、また学校や職場における適応・不適応が彼らのアイデンティティに強く影響してきた。このファミリーのメンバーの場合、すでにみたように、呼び寄せによって日本に集合した人たちが、彼らの精神的・物質的な安定にはこのファミリーのコミュニティが機能している。日本に持ち込まれたブラジル社会に帰属することで三世もまた安定して日本に滞在することができている。

就学中の三人はいずれも日本の学校に通い日本人社会とも関係をもっている。ブラジル人学校に就学する場合、子供は生活の相当部分を日系ブラジル人の社会で過ごすことになり日本社会への適応は限定的となる。しかし、日本の学校に通う場合には、学校は子供が接するもつとも重要な日本人のコミュニティとなり、親族のコミュニティであるブラジル人社会と、学校という日本人社会の二重のコミュニティで生きることになる。もちろん適応の度合いによって違いはあるが、二重性は子どものアイデンティティをしばしば不安定化し、ブラジル社会である親やファミリーとぶつかる可能性も生じる。

これは日系人が就業する職場のコミュニティについても言えることである。日本人とともに働く職場が日系人に限定された特殊な職場か違ってくるのであり、日系人の集団からなる職場の場合には日常のほとんどがブラジル人コミュニティでの生活となる。ただ、現状では一般の労働市場は日系ブラジル人に閉ざされており、多くは日系人が組織的に雇われた職場で就業しているため日本への適応も限定的なものとなっている。

このファミリーの三世は、二つのパターンに分かれる。一つは、日本で思春期を過ごしながら日系人の職場で就業し、ブラジル人としての意識を持ち続けている例である。彼らの日本社会への適応は限定的であり、日系人コミュニティの中で生きようとしている。また一つは、日本人社会に適応し親や親族とぶつかり、また悩みながら日本人化を強め、国籍も日本を選択しようとしている例である。

前者の例がC-1とC-2である。この兄弟は一九九二年、六歳、四歳のときにB-2と家族で来日した。しかし二年後に両親が離婚したことでブラジルに戻り、一六歳と一四歳のときに、日本に滞在する父親が引き取る形で再来日している。つまり思春期にブラジルから日本に移住し、その後日本で暮らしている。日本の学校には通ったが、学校という日本社会に十分適応することがなかった。これには来日したときの年齢が関係していると思われる。ポルト

ガル語を母語とし家庭ではポルトガル語を話してきたが日本語も堪能である。二〇〇七年現在、二二歳と二〇歳、いずれも父が勤める日系ブラジル人を雇用する業務請負会社で働き、請負先の工場のラインで働いている。これは学歴が高くなく日系人青年にとつて一般の労働市場が十分に開放されていないことによるが、日系ブラジル人にとつては言葉のハンディもあり問題とならない順応しやすい職場であつたことも関係している。

このうちC-1は、二〇〇六年にブラジルから出稼ぎでやってきて間もない日系三世の女性と結婚、工場のラインとともに働き、会社が借り上げた日系ブラジル人用のアパートに居住している。部屋には出稼ぎ日系人が不自由ないように冷蔵庫、洗濯機、テレビなど生活に必要なものほとんどが装備され、職場との間は会社のマイクロバスが送迎している。アパートの他の日系人とともに毎朝このマイクロバスで工場に向かい、仕事が終わると迎いのバスでアパートに戻る。週のうち六日は残業を含めて夜の九時まで働き、休日は休養でほとんど家にいる。休日が二日続くときには、その一日を六本木の外国人が多く集まるディスコに行つて朝まで楽しむことが多い。また家では、日系ブラジル人相手の店でブラジルのテレビ番組を録画したビデオを借りて楽しむ。日本人社会とは隔離された形で日本に住し、生活の環境とスタイルから日本社会への適応も必要とされない。

彼らの当面の夢は共働きで車を買うことにあり、将来はブラジルで観光関係の会社を興すことを考えている。国籍はブラジルで日本への適応は限定的だが、精神的にブラジルと強くつながっている訳でもない。将来ブラジルで事業を起こす計画も、「ブラジルは物騒で危険が多いから戻つてもたぶんまた日本に来ることになるでしょう」と不安が大きい。つまり、日本社会への適応が限定的である一方で、ブラジル人としての意識も強くはなく、ブラジル社会への再適応に不安を抱いている。客観的には彼らは恐らく定住化の道をたどることになるだろうと考えられる。C-2は独身であり父親と同居しているが、彼も同様に適応の度合いは高くない。

三人兄弟の一番末のC-3は兄二人とは全くことなる。彼は一二歳で来日し、中高を日本の学校で過ごしている。二〇〇七年三月の時点で一七歳、高校ではサッカー部のレギュラーとして全国大会にも出場した。適応力の大きな一〇代はじめに来日し学校という日本人社会に完全に適応している。C-2と同様に父B-2と同居しポルトガル語を話す。日常的には意識的に日本語しか話さない。ファミリーを中心とした親族コミュニティに帰属する一方で、学校という場で日本人のコミュニティに馴染み、日本に帰属意識を強めることで適応の度合いが高く、すでに日本に同化しているといつてよい。このためアイデンティティをめぐってファミリーと摩擦を起こすこともあるが、彼自身は日本への帰化を決意している。

B-3の子のC-4も彼同様に日本への帰化を決意している。二〇〇一年、家族とともに一二歳で来日し、日本の中学と高校に通い、二〇〇七年三月の時点で高校三年生である。彼女もまた学校という場で日本人社会にとけ込み日本に適応している。家庭ではおもにポルトガル語を話しているが、すでに日本語が母語となつており日本語で思考している。つまり学校という社会を通して日本に同化している。しかし、国籍がブラジルでブラジル人であること、また日本人の血を半分しか引き継がない混血であることを強く意識し、自分はこの国の人間なのかというアイデンティティに悩んできた。彼女の場合、同居している日系一世の祖母との精神的つながりが強く、また祖母の影響もあつて信者同士のコミュニティが重視される某宗教に入信して精神的な安定を得ており、これをきっかけに日本への帰化を決意することになった。

一般に日系人の定住化は、日本語の習得、日本の学校への就学による子供の日本社会への適応、一般の労働市場への参入、住宅の購入などが契機となる。この親族の三世のうちの二人は日本の学校での生活を通して日本への帰化を決意しているが、これは二世である親の定住化を促し、親にあたるB-2とB-3はすでに日本に住宅を購入してい

る。また彼らの従兄弟の場合、その子供をブラジル人学校に入学させたが、滞在が長期化する過程で日本の学校に転校させた。これは帰国が遠ざかったことで子供のアイデンティティの転換を意識的にはかったことを意味している。

(5) 日系ブラジル人と日本の社会

少年期に日本の学校生活を通して日本に同化した人たちを除くと、在日三世はブラジル人としてブラジルへの帰属意識をもち続け日系人出稼ぎとしての生き方を続けることが多い。彼らは二世のように日本に対して特別な思いはなく、日本のイメージも現実的で美化されたものではない。このため二世のように自己の中のブラジル人と日本人の間で悩むことも少なく、適応も限定的であった。このファミリーの場合も、二世であるB-1は絶えず自分の中の日本を問い続けているが、ブラジル人としての生活スタイルを続けている三世にはこうした葛藤がみられない。

以上述べてきたように、日系ブラジル人にとって精神的・物質的な安定を保障しているのは家族なり親族のコミュニティである。群馬県の大泉のような日系ブラジル人の集住地区の場合には周囲に沢山の日系ブラジル人がいることで孤独感は少ないし、生活を物質的な面で支えるエスニックビジネスも有効に機能している。ブラジルの生活を可能とする商品が揃い、ブラジルの情報が得られ、ブラジルの匂いを漂わせたマーケットはアイデンティティを確認する場にもなっている。また鶴見の潮田地区のように、地区の住民を頼って移住した日系人の地縁、血縁のコミュニティが存在するところもある。これに対して、このファミリーが居住するのは日系人の集住地区ではない。とはいえファミリーへの帰属意識は強く、親族コミュニティが相互扶助的組織としての役割を果たしている。つまり日系ブラジル人のコミュニティはさまざまであり、また重層化しているが、移住者の精神的安定を保障するこのコミュニティが一面で日本社会への適応のない長期滞在を可能にしているといつてよい。

閉鎖型のコミュニティは生活の場のみではなく、彼らの職場においても同様である。彼らが就くことができる職種は日本語の能力とも関係するが、日本人社会と遮断されている場合が多い。先に紹介したC-1が働く業務請負会社も、寮と職場の間をマイクロバスが送迎し、日系人の集団で一日一時間の労働に従事している。生活と仕事の空間が日本人社会から切断され、接触する場も時間もきわめて限られている。現代の日本人の社会はとくに都市で住民相互の関係が希薄化している。共同社会という意味でのコミュニティは地域よりも職場や学校の方が重要度が高い。この点で、業務請負業などに閉じ込められている現状では、日本社会への適応も進み難い。

適応が限定的でアイデンティティ転換をとまなうことなく滞在が長期化していくと、日系人社会はマイノリティ社会としての性格を帯びていくであろう。日系人コミュニティのなかでブラジル人として生きる態度である。日本の教育を受けた子供たちの中にはC-3、C-4の二人の高校生のように、適応から日本社会への統合の道をたどる人たちが生まれるに違いない。しかし日系人の多くはこうした方向には進まないだろう。

これはすでに示唆したように、日系人が帰国を予定した出稼ぎとして入国したことに理由の一つがある。日本での定住を意図していなかったたのである。しかし、滞在の長期化にもかかわらず適応に向かわないということでは、日本人社会の性格なりシステムにより大きな原因がある。日本人のブラジル移民の場合、移住した先でも日本人であり続けようとした。しかし、ブラジル社会は日系人が日本に固執したにもかかわらず彼らを市民として受け入れた。努力によって成功するチャンスが与えられ、まじめで勤勉な人たちであるとして尊敬されるようにさえなった。ブラジルは開放的な移民国家として日本人の移民を受け入れたのである。

これに対して、日本に住む日系人はあくまで企業の都合で受け入れられた出稼ぎの外国人労働者であり、平等な立場で日本社会に招かれた訳ではない。閉鎖的で特殊な労働市場に閉じ込められ、日系人社会は異質な集団として区別

されてきた。五年、一〇年滞在しても状況はほとんど変わらず、差別は厳然として存在し続けている。彼らには将来に渡って成功のチャンスは与えられないだろう。つまり、日系ブラジル人が閉鎖的なコミュニティの中で生きているのも、もとをただせば日本社会の閉鎖性の結果によるといつてよい。

また日系人が日本人の顔をもち日本人の文化を理解できると想像されたがゆえに、異質な人たちだと知ったときの日本社会の反応は厳しく、日本をルーツとしてやってきた日系人を大いに苦しめてきた。日本社会に適應せず出稼ぎ意識をもち続けたのには日本人社会の排他性が大きく関係し、日系人の多くが日本への適應を控えたのもこうした閉鎖性の強い日本社会において自己のアイデンティティを保つ必要があったからにほかならない。

注

- (1) 梶田孝道他『顔の見えない定住化』名古屋大学出版会、二〇〇五年、一一〇―一一九頁。
- (2) 谷裕之「グローバル化する経済とラテンアメリカ社会」『ラテンアメリカ』大月書店、一九九九年、一三五―一六七頁 参照。
- (3) 児玉正昭「移民県としての広島」『歴史公論』雄山閣、一九七六年、一〇〇頁。
- (4) 当時の開拓移民の実態については自らも移民の一員であった半田知雄の名著『移民の生活の歴史』サンパウロ人文科学研究所、一九七〇年に詳しい。
- (5) 移民八十年史編纂委員会『日本移民八十年史』一九九一年、八七頁。
- (6) 前山隆『移民の日本回帰運動』NHKブックス、一九八二年、二九頁。
- (7) 石井陽一「移民と移住者の概念」神奈川大学人文研究所『人文研究』六〇号、一九七四年、八二頁。

- (8) 前山、前掲書、三五頁。
- (9) レイン・リョウ・ヒラバヤシ編『日系人とグローバリゼーション』人文書院、二〇〇六年、四七八―四九頁。
- (10) 前山、前掲書、一九頁。
- (11) 梶田、前掲書、一二〇頁。
- (12) 田宮虎彦『ブラジルの日本人』朝日新聞、一九七五年、七―三〇頁。
- (13) 大野盛雄編『ラテン的日本人』NHKブックス、一九六九年、五九頁。